様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２４年５月１３日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５２０３１４
研究課題名（和文）18 世紀日欧にみるベニョフスキー「世界周航」の衝撃

研究課題名（英文）Benyowsky’s *Memoirs and Travels*: Their Impact on 18th-century Europe and Japan

研究代表者
佐藤　研一（SATO KENICHI）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：80170744

研究成果の概要（和文）：コッツェブー作『ベニョフスキー伯』(1795) は、「トルコものオペラ」の変種である。当劇が、20 世紀までドイツのオペラや小説に継承された点に、ベニョフスキー著『世界旅行記』(1791) の影響がみてとれる。英国では、マダガスカル島旅行記ブーム等がベニョフスキー受容の素地を作った。また、ドゥルーリ著『マダガスカル島』(1729) と比較する限り、ベニョフスキーの記述も信憑性がある。彼が身を以ってロシアの国家的膨張を体験した点を考えれば、ロシア南下の「警告」も単なる虚言に留まるまい。

研究成果の概要（英文）：*Count Benyowsky* (1795) written by August F. F. von Kotzebue (1761-1819) is a variant of what is called Turkish Operas featuring enlightened heroes. Surprisingly enough, his play had been handed down to many literary works by the mid-20th century. That is where the influence of Benyowsky’s *Memoirs and Travels* (1791) can be found in Germany. In England where his *Memoirs* were published in 1790, a year prior to the German version, the milieu of the reception of travel journals had been already created. Given his participation in the insurrections against the Russians in Poland and Kamchatka, Benyowsky’s warnings of Russia’s southward policy to the Tokugawa *shogunate* is surely more than just ravings that have been generally regarded among the Japanese to date.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：ベニョフスキー、コッツェブー、カムチャッカ半島、マダガスカル島、「トルコものオペラ」

１．研究開始当初の背景

（１）『世界旅行記』と著者の特異性

①稀代の冒険家ハンガリー人モーリツ・ベニョフスキー Móric Benyovszky（1746-1786）著『ベニョフスキー伯旅行記。シベリア・カムチャッカ半島より日本・中国を経てヨーロッパへ』（以下、『世界旅行記』と呼ぶ）（英語版 1790,独語版 1790,1791,1791 他）は、真偽が錯綜し荒唐無稽であるにもかかわらず、あるいは、それゆえに、汎欧的な人気を博した。しかも、当時のベストセラー作家、ドイツのコッツェブー（1761-1819）が『世界旅行記』を下敷きに通俗劇『ベニョフスキー伯、あるいはカムチャッカ半島の謀反』（1795）――ロシアでは反ロシア的という理由から発禁処分――を著したことにより、『世界旅行記』の名声は一段と高まったのである。

②ベニョフスキーその人の生涯も、波瀾万丈である。ロシア帝国が南下を始め、ポーランドに触手を伸ばす 1768 年、彼は当地の反ロシア武装蜂起に加担、捕虜となりカムチャッカ半島に流刑。しかし 1771 年、百名ほどの囚徒と語らい反乱、反エカテリーナ 2 世の旗印を掲げ、官船を強奪し日本・琉球・台湾を経てポルトガル領マカオに至り、クックやラ・ペルーズに先駆けて、北太平洋航海を成し遂げた。マカオからマダガスカル島経由でヨーロッパにもどると、フランスを後ろ盾にマダガスカル植民地経営を目論むも失敗（1774-76）、最後は同島でフランス軍に刃向って戦死した。フランス革命勃発に遡ること 3 年前である。

（２）『世界旅行記』の東西世界における衝撃

①日本外交史上見逃せない点は、この「ハンベンゴロ」ことベニョフスキーが日本漂着の折――まさにロシアに対する警戒心が醸成され始めた頃――出島オランダ商館長宛にロシアの日本侵略という偽の情報の一書を送って、衝撃を与えたことである。この「警告」により、工藤平助の『赤蝦夷風説考』（1783）や林子平の『海国兵談』（1791）が著され、ついに幕府は、北方国防対策の道を歩み出す。とまれ、「ハンベンゴロ」問題は、田保橋潔や沼田次郎により、研究し尽くされたといってよい。だが「警告」も、『世界旅行記』との有機的関連から、見直しうるのではないのか。

②『世界旅行記』が、一般には「法螺吹き」の偽旅行記とみなされるため、その本格的研究は、20 世紀以降のヨーロッパでは見出せない。だが、『世界旅行記』が当代ヨーロッパ文芸に影響を及ぼした点や、独語版翻訳者の一人が当代ドイツ随一の批判的知識人ゲオルク・フォルスター（1754-94）である点を考えに入れれば、黙殺はできまい。むしろ、東西両世界における影響の実態を、具体的に把握することが必要なのではあるまいか。

２．研究の目的

（１）18 世紀は、クックらの太平洋探検を通しテラ・インコグニタが消滅して、世界が球体としてひとつに結ばれる。本研究は、かかる背景の下で、極東からマダガスカル島に至るベニョフスキーの世界周航が、どのようにヨーロッパと東アジアの東西両世界を――片や文学的次元で、片や政治的次元で――揺れ動かし、近代社会システムへ導く契機を作るのか、その一端を解き明かそうとするものである。

（２）その際、ベニョフスキーを戯曲化したコッツェブーや特異なマダガスカル島探検家ドゥルーリ（1687-?）に着目することを通して、ヨーロッパに惹き起こした衝撃の実態

を見定めようとする。日本側の衝撃に関しても、この考察に立って、田保橋潔や沼田次郎の研究を踏まえながら「警告」を再考する。

３．研究の方法

（１）ドイツと日本における『世界周航記』

①フォルスターの『世界周航記』(1777) を、啓蒙的航海者（ブーガンヴィル、クック、ラ・ペルーズ）の旅行記のみならず、ヘルダーの思想とも比較検討して、非ヨーロッパに対する姿勢を見極める。

②オーストリア国立図書館にて、フォルスターによる独訳版『世界旅行記』のカムチャッカ半島――コッツェブー作『ベニョフスキー伯』の舞台――編を、シュテラー著『カムチャッカ半島地誌』(1774) と比較考定して、描写の信憑性を確かめる。

③コッツェブーが、いかに『世界旅行記』の素材を基にしながら、『ベニョフスキー伯』の独自の文学世界に練り上げているのか、分析を施す。それとともに、オーストリア国立図書館にて文献調査を行い、『世界旅行記』のドイツ文学に及ぶ波及の実態を見定める。

④東西両世界に通底する世界史の動向を念頭に置きながら、『赤蝦夷風説考』や『海国兵談』を参考にして、「警告」の一書を『世界旅行記』との有機的連関において再検討する。

（２）英国と日本における『世界旅行記』

①『世界旅行記』の英国における大流行の背景を探る一環として、英国図書館にて、マダガスカル島旅行記関連文献を調査する。そのうえで、同島記述について、『世界旅行記』を、ベストセラーのドゥルーリ著『マダガスカル島、または同島捕虜15年間に亙るドゥルーリの記録』(1729) と比較検討する。

②当代英国におけるコッツェブーの影響の実態を見極めるため、英国図書館にて、『ベニョフスキー伯』の英訳版に関して文献調査を行う。劇評等も精査して、当戯曲の英文学における位置づけを把握する。

③ベニョフスキーによる日本像の描写の特徴は何か、信憑性はあるのか、検証する。その際、『世界旅行記』をケンペル著『日本誌』(1727) と対照考定する。

４．研究成果

（１）ドイツにおける『世界周航記』

①フォルスター著『世界周航記』(1777) を、ヘルダーの『人類歴史哲学考』(1784-91) や『人間性促進のための書簡』(1793-97) との比較検討により、フォルスターもまた、ヘルダー同様、複数座標軸的視座に立ち、歪曲された非ヨーロッパ像を論難し、ヨーロッパの独善的文明観を批判する点を見定めた。いわゆる啓蒙的航海者とは一線を画する。ついで、オーストリア国立図書館にて、カムチャッカ半島の描写に関して、フォルスターによる独語版『世界旅行記』をシュテラー著『カムチャッカ半島地誌』と比較考定した結果、フォルスターも指摘する通り、作り話とはいえない、と考えられる。

②オーストリア国立図書館にて、ドイツ文学にみる「ベニョフスキーもの」の文献調査を行った。それを通して、コッツェブー以外にもつぎの文献を発掘。すなわち、ゲーテの義弟ヴルピウス作悲劇『ベニョフスキー伯』(1792)、トライチュケによるデュヴァル作オペラ・コミック『カムチャッカ半島の流刑者たち』(1790) のドイツ語翻案版 (1804)、作曲家ドップラーによるコッツェブー作『ベニョフスキー伯』のオペラ版 (1847)、閨秀作家ミュールバッハ作伝記小説『ベニョフスキー伯』(1865)、クリスツァート作小説『ベニョフスキー』(1937) である。

③コッツェブーが、いかに『世界旅行記』を

素材にして、『ベニョフスキー伯』という戯曲に昇華しているのか、具体的な分析を施した。その結果、『世界旅行記』に描かれる極北カムチャッカ半島の風物、および特徴ある人物（傑士、酔いどれ、お人よし、陰謀家、烈女）を十分踏まえつつ、当代ヨーロッパ人の耳目を驚かした冒険家ベニョフスキーを、同じく「謀反」や「革命」という時好に投じる題材と巧みに融合させて、口当りのいい通俗劇に仕上げていることを読み解いた。そのうえで、コッツェブーの『フォルメンテラ島の隠者』（1786頃）、『黒人奴隷』（1796）、『ラ・ペルーズ』（1798）など北アフリカやカリブ海諸島や南太平洋を舞台とする「異国もの」戯曲とも比較検討を加えた。それによって、『ベニョフスキー伯』は、ひっきょう、「寛容」、「博愛」、「自由」、「平等」の精神の持ち主――啓蒙された豪傑の主人公を据える通俗的「トルコものオペラ」の一変種にほかならないことが明らかとなった。

④時流に乗るフランス革命の標語を鼓吹する『ベニョフスキー伯』が、源流となり、トライチュケの翻訳オペラであれミュールバッハの伝記小説であれ、様々な形をとって、20 世紀前半に至るまでドイツ文学に受け継がれてゆくことが分かる。

（２）英国における『世界旅行記』

①英国における『世界旅行記』の一大ブームの文化的背景を浮き彫りにするため、マダガスカル島に焦点を絞った。というのも同島は他のアフリカ地域（北アフリカを除く）と異なり、新大陸やアジアへの航海途次の薪水・食糧補給地ゆえ、旅行記等の実見録が多く残されているからである。英国図書館にて、『世界旅行記』刊行までの同島実見録調査の結果、英国の出版物としては、1640 年上梓のマダガスカル島訪問記が嚆矢といえる点を見定めた。さらに、異境探訪の観点から、デフォー作『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』（1719）にも考察を加えた結果、英国では冒険家ベニョフスキー受容の土台が用意されていたことが知られた。

②18 世紀英国では、アフリカの同義語とみなせるエチオピアのイメージについて考察した。その際、ポルトガル人イエズス会士ロボによるエチオピア報告の重訳版、すなわちサミュエル・ジョンソンの『アビシニア旅行記』（1735）や、のちに「ラセラス」として定着した『アビシニアの王子』(1759)を取り上げた。とくに後者は、舞台がアフリカながら、幸福追求という観念的著作であり、だからこそ、ヨーロッパで時好に投じた。「幸福の谷」というユートピアから脱出し、異世界を放浪するエチオピア王子が英国人を魅了したまさにそのとき、ベニョフスキーはマダガスカル島入植、その 2 年後の 1786 年に殺害される。こうして、英語版『世界旅行記』刊行の 1790 年には、当旅行記流行の素地は整っていたことが分かる。

③『世界旅行記』を、いまだデフォー著者論が根強いドゥルーリ著『マダガスカル島』と比較検討の結果、同島記述に大きな矛盾はみられない点から、ベニョフスキーの描写も大筋で信憑性があろう。

④英国図書館には、コッツェブー作『ベニョフスキー伯』の英訳版が 2 種類（ロンドン、1798 年刊、ダブリン、1799 年刊）（1800 年、1801 年再版）所蔵されている点を確認した。いずれも、主人公は一義的に「自由の闘士」として描かれている点が際立つ。それとも関わるが、劇評等をみる限り、コッツェブーの評価は、ドイツ本国と異なり、英国では高い。

（３）日本における『世界旅行記』

①『世界旅行記』の日本記述からは、ベニョフスキーの主たる関心は、風物や人間よりも、

商取引である点が読み取れる。また、ケンペル著『日本誌』と比較検討する限り、いかに潤色があるにせよ、単なる作り話とはいえまい。

②奇しくも出島オランダ商館長宛に「警告」が出された同じ 1771 年、オーストリア皇帝ヨーゼフ 2 世は、「オスマン帝国の千倍も脅威のロシア」の南下政策を憂慮するメモを残している。ベニョフスキー自身、『世界旅行記』に記すように、ポーランドにおける反ロシア武装蜂起加担、ロシア軍捕虜、カムチャッカ半島収容所脱走という個人的体験を通して、新興勢力ロシア帝国の東西における国家的膨張を、身を以って知っていた。その点を考えに入れれば、「警告」も単なる「法螺話」として片づけるわけにはゆくまい。「警告」は、「鎖国政策への反省の端緒となったという点で特異な歴史的意義を持つ」（沼田次郎）のみならず、東ヨーロッパ弱小国を出自とする者――たとい自己演出に長けた冒険家であったにせよ――の鋭い歴史的感覚を窺わせるものといえるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

１．藤田みどり［緑］、エチオピア外交使節の見た昭和初期日本、比較文学研究、査読有、94 巻、2010、pp.47－70.
２．佐藤研一、J.M.R.レンツの描く異邦人――プラウトゥスの翻案劇『トルコの女奴隷』と『アルジェの人々』をめぐって、東北ドイツ文学研究、査読有、52 巻、2009、pp.187－210.
３．藤田みどり［緑］、喜歌劇にみる黒人奴隷像：ビカースタフ作『南京錠』をめぐって、異境、査読無、創刊号、2008、pp.1－64.

〔学会発表〕（計７件）

１．藤田緑、ヘルイ著『光の砦』再考――如何にして「歴史」はつくられるか、第33回「中東」表象研究会、2010年12月1日、仙台
２．佐藤研一、ヴァイマルのJ.M.R.レンツ、第70回18世紀ドイツ文学研究会、2010年6月19日、東京
３．佐藤研一、18世紀ドイツ戯曲の描くアフリカ――モーツァルトからコッツェブーまで、第30回「中東」表象研究会、2010年3月29日、仙台
４．藤田緑、『光の砦 日本国』――エチオピア使節記から読む20世紀初頭日エ関係、第26回「中東」表象研究会、2009年9月30日、仙台
５．佐藤研一、18世紀ドイツ文芸と非ヨーロッパ――レンツによるプラウトゥスの翻案劇『アルジェの人々』を素材にして、第24回「中東」表象研究会、2009年3月13日、仙台
６．佐藤研一、J.M.R.レンツの描いたトルコと北アフリカ――プラウトゥスの翻案喜劇『トルコの女奴隷』と『アルジェ人たち』をめぐって、第65回十八世紀ドイツ文学研究会、2008年9月4日、福島
７．藤田緑、18世紀英国の喜歌劇『南京錠』にみる異人とトルコ人、第21回「中東」表象研究会、2008年11月26日、仙台

６．研究組織

(1)研究代表者
佐藤　研一（SATO KENICHI）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：80170744

(2)研究分担者
藤田　緑（FUJITA MIDORI）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：10219024